

交流会1 「修士論文を投稿するためのプロセスと方略」

修士論文を投稿するためのプロセスと方略

My Process and Strategy for Posting a Master Thesis.

船木 淳

Jun Funaki

第2回神戸看護学会学術集会【交流会1】において「修士論文を投稿するためのプロセスと方略」について発表する機会をいただきました。今回、交流会のテーマが決まるまでの経緯、交流会の内容、私が発表した修士論文（質的研究）を投稿するためのプロセスと方略、参加者した方々からの感想について紹介します。

<交流会の内容決定に至るまでの経緯>

企画者と共に交流会の進行についてディスカッションする中で「修士論文に関する学会発表はできたとしても、論文を投稿するまでに辿りつかないのは何故か」という問いから始まりました。その中で、私自身が大学院を修了してから論文を投稿するまでに抱いていた思いとして「修士論文を何とか形にしたいけど働きながら取り組むには十分な時間がない」、「自身の単位認定だけを目的とした修士論文となっては研究協力者に申し訳ない」、「学会発表だけにとどまらず論文として世に出すことが研究協力者や指導教員への感謝にも繋がる」といった思いがあったことを企画者と共有しました。そのような中で「修士論文投稿の弊害となっているのは何か?」といった観点から考えた時に「論文投稿までのプロセスが明確に理解できていない」、「投稿後の流れが分からない」、「査読者からどのようなコメントがくるのか予想がつかない」、「査読対応をどのようにしたら良いのか分からない」といった論文投稿全般のイメージがついていないことが原因であるということに気づきました。

これらを踏まえ、修士論文を投稿し採択を受けた経験を参加者に率直に伝えることで（質的・量的研究の観点から）論文投稿に向けてのモチベーションを高めることができるのではないかと考え交流会を企画しました。

<交流会の内容>

企画者とディスカッションを重ね、交流会の目的を「修士論文を投稿することができる」とし、目標を「①修士論文を投稿するまでのプロセスを理解できる」、「②論文投稿における課題を達成するための方略を理解できる」としました。

交流会の冒頭で、専門学会で編集委員を担当されている先生に、学会で定めている論文投稿規定について説明していただきました。具体的には学会側に論文が届いた後、どのような手続きを踏まえて査読者に振り分けられているか、投稿論文が受理されてから投稿者に査読結果が返却されるまでの過程、再査読となった場合の論文の取り扱い、査読者によって論文に関する意見、採択の判断が異なった場合における編集委員としての対応等について説明をいただきました。

その後、発表者2名で修士論文投稿のプロセスと方略について質的・量的研究の観点から各20分ずつプレゼンテーションを行いました。プレゼンテーションは2名とも共通の内容（①論文投稿に向けたモチベーションの維持、②指導教員への相談方法、③投稿先の学会の選び方、④論文のまとめ方、⑤査読結果の受け止めと対応、⑥掲載までの時間経過、

⑦投稿後の状況)で発表しました。

2名の発表が終わった後、論文投稿に向けて参加者個々のモチベーションアップが図れることを目的に参加者同士でグループになり、修士課程修了後の現状報告、論文投稿に向けてのモチベーションアップ、修士論文のまとめ方に関するフリーディスカッションを行い、個々の考えや思いを共有できるようにしました。

最後に学会で査読を担当されている先生から査読者の観点から、投稿論文をどのように査読しているか、投稿者とのやり取りで感じる投稿者への印象、論文投稿や査読後の修正論文を学会側へ提出する際のお作法的な部分も含めてお話をいただき、交流集会を終えました。

<修士論文(質的研究)を投稿するためのプロセスと方略>

私の修士論文のテーマはフライトナースの看護実践を明らかにすることであり、フライトナースにインタビューを実施し、質的帰納的に分析をしました。その後、修士課程修了から6年かかりましたが原著論文として採択を受けることができました。

交流集会でプレゼンテーションさせていただいた内容について紹介します。

[研究概要]

修士論文のタイトルを「フライトナースの看護実践モデルの構築」としていましたが、投稿するにあたり、修士論文の内容を更に見直しました。そのうえで、修士論文の研究目的から大幅にズレないように研究目的を「フライトナースの経験の語りを基にフライトナースの看護実践を明らかにし構造化すること」とし、原著論文のタイトルを「フライトナースの看護実践の構造」へと修正しました。研究方法はフライトナースが語る事象の核心・本質について考え、看護実践を構造的に把握することができる質的統合法(KJ法)の手法を用いました。

[モチベーションの維持]

修士課程修了後も研究協力者と学会等でお会いする機会があり、この方たちの協力が無ければ修士論文を完成させることができなかつたと感じていました。また、インタビューで施設を訪問した際に、フライトナースを紹介していただいた師長から「こん

な研究を待っていました」と声をかけられたことから、師長の期待にも応えたいという気持ちが常にありました。

論文投稿時はフライトナースに関する論文が少ない状況だったため、誰よりも先にフライトナースの研究論文を世に出すという、誰にも負けたくない気持ちがありました。そして、私自身が手術後の療養中であつたため、自分自身の生活への張り、療養中であつても自分らしく療養前と同じ生活を送ることを論文完成へのモチベーションに繋げていました。

[指導教員への相談方法]

私は、修士課程1年目の時は夜勤専属看護師として働きながら大学院に通っていましたが、2年目は指導教員の下で教員としての道を歩み始めました。指導教員が直属の上司でもあつたため、修士課程修了後も常にコンタクトをとることが可能な状況でした。その後、それぞれが違う大学へ就任することになりましたがメールで近況報告し、学会でお会いした時には「修論投稿宣言」を欠かさずしていました。しかし、実際は仕事の忙しさに追われ論文投稿は進んでいない状況でした。

私が修士課程を修了したのが2009年3月になります。2012年12月に指導教員に論文投稿に取りかかっていることをメールで伝えていました。2013年5月になっても論文が完成していないことをメールで報告しています。その年の8月によく論文が完成し、論文投稿に向けた指導のお願いをしました。9月に指導教員から考察の大枠を示していただいたうえで考察の視点について再検討するよう返信がありました。その後、論文を修正し、修士課程修了から4年半後の2013年10月に論文を投稿することができました。この間、指導教員とのやり取りは全てメールでした。

[投稿先の学会の選び方]

フライトナースが所属している専門の学会もありましたが、論文はフライトナースだけではなく、フライトナースから看護を引き継ぐ、またはフライトナースに看護を引き継ぐ救急看護師にも読んで貰いたかつたため、フライトナースに限定せずに、救急看護師も多く所属している学会を投稿先として選定しました。

また、修士論文に関連した学会発表は内容の切り口を変えて3つの学会、そのうちの1つは国際学会で発表しました。

〔論文のまとめ方〕

論文をまとめるにあたりインタビューデータ（ラベル）の見直しから行いました。ラベルの意味内容の表記が曖昧な部分は生データから見直し、各ラベルのネーミング・関連性、構造化について何度も検討を繰り返しました。

考察の鍵となる部分については修士論文の内容を活かしつつ、更に関連文献を読み直し、結果の裏付け、考察の根拠を示すことができるように再考を重ねました。

学会の論文投稿規定上、原著論文は図・表込みで16,000字と規定されていました（図・表は刷り上がり1ページあたり2,000字に相当）。質的研究においては研究協力者の語りを表記しながら結果を示すことが重要であると認識していたため、生データをどのようにラベル・表札へと変化させていったのが分かるように（生データの記述、叙述化・図解化）、規定の文字数の中で表記することの難しさを実感しました。また、質的統合法（KJ法）においては結果に図解化が含まれることに加え、研究目的がフライトナースの看護実践を構造化することであったため、必然的に論文中に2つの図が掲載されることとなります。そのため、1ページに占める図の大きさ、それに伴う文字数の変化についても考慮しながら、論文全体の構成について検討しました。

〔査読結果の受け止めと対応〕

2名の査読者から以下のコメントが返却されてきました。

【査読者 A】

- ・研究目的と文章の繋がりがとれていない。
- ・フライト回数に差（100回～700回）がある中で、研究対象者の背景を踏まえて一塊に結果として考えて良いのか。その根拠を示す、または研究の限界に繋げてはどうか。
- ・構造図のフレームをシンプルなものにしてみようか。

⇒一部修正後、採用。原著論文で可。

このコメントから、査読者 A に対して「前向き意見で優しい印象」を持ちました。

【査読者 B】

- ・結果と考察、結論に繋がりがなく飛躍がみられる。
- ・考察が曖昧であり、先行研究の抜粋に終始した感が否めない。
- ・「結果・考察・結論」の見直しが必要である。
- ・構造図が考察のタイトルを付けただけで理解できない。
- ・構造図がフライトナースの看護実践を構造化できているとはいえない。

⇒修正後、再査読。原著論文ではなく研究報告として採用可。

このコメントから、査読者 B に対して「否定的意見で冷たい印象」を持ちました。

両者の意見を基に学会側からは「修正後再査読」の返事をいただきました。この知らせを受けてモチベーションが低下し、しばらく論文と向き合わない「現実逃避の時期」を迎えました。その背景には、再査読の知らせにショックを受けたこと、何をどのように修正すれば良いのか分からない、論文を全否定された感、そして査読者 A・B で論文の解釈が異なっており、どの意見を基に修正をすれば良いのか分からなかったことが影響しています。

現実逃避中においても研究協力者のことは常に頭をよぎっていました。悩んでいても先に進むことはできないと判断し、指導教員の助けが必要と考えメールで連絡をしました。指導教員からは「細かい部分まで見てもらい良かったじゃない、修正したら論文になるから頑張りましょう」、「あなたと私の2人で作成した論文だから最後まで力を合わせて頑張りましょう」とお返事をいただき、再度モチベーションを上げることができました。そして、指導教員が査読者の意見を読み取り、修正ポイントを具体的に整理し、方向性を導いてくれたことで「やる気スイッチ」を Off → On へ切り替えることができました。

査読論文を学会側に提出する際、各査読者のコメントに対する修正箇所が明確に分かるよう対応表を作成するよう指導教員からアドバイスをいただきました。査読論文を提出する時点においても査読意見に対して素直になれない自分がいました。そのため、自分では気づかないうちに査読者に不快を与えてしまうような端的な表記になっていました。そのことに対して指導教員から「査読者は忙しい時間を

削ってあなたの論文を読んでくれたのだから、感謝の思いも伝わるように文言を修正するように」と指導を受けました。

〔論文掲載までの時間経過〕

日付	出来事
2013年10月23日	学会事務局へ論文送付
2014年 7月19日	査読結果の返事（8月11日までに修正原稿を送るよう指示あり）
8月	<ul style="list-style-type: none"> ●実習期間中であり、修正困難であることを指導教員へ報告。 ●学会事務局に修正原稿の締め切りを延長したいことを相談。 ●9月末日までに延長することの承諾を得る。
9月-10月	<ul style="list-style-type: none"> ●手術 & 治療開始（論文修正できず）。 ●指導教員と相談したうえで11月末日まで再延長したいこと学会側に連絡。 ●指導教員から体調・仕事の問題もあり、修正論文を見る時間が取れないとの返事あり。
11月	●修正論文を1月末日までに提出することを学会側に連絡。締め切りを再々延長。
2015年 1月	査読後修正論文を学会側へ送付
4月21日	再査読後の結果が届く。 「査読意見に沿って修正することを条件に原著論文として採用」 【意見】 <ul style="list-style-type: none"> ●面接内容が削除された理由 ●結論が端的になり過ぎている ●解釈に誤解を生みそうな表現の修正 ●用語、表記の統一 ●誤字、脱字の修正
5月13日	再査読後修正論文を学会事務局へ
7月24日	校閲論文の確認（8月3日必着）
30日	校閲論文を事務局へ送付
8月末日	○○○学会論文雑誌○巻○号に掲載

修士課程修了から6年かかり、原著論文として採択を受ける

〔投稿後の状況〕

修士課程修了後も継続してフライトナースに関する研究を続けています。そのような中で、フライトナースに関連する論文や学会発表時の考察、また引用・参考文献の部分に私の名前が掲載されていると率直に嬉しさが込み上げ、論文が他の方々にも読まれている＝世に出たという喜びを実感しています。

学会でフライトナースのセッションに参加した際、質問をする機会をいただき、所属と名前を述べてから質問をしました。セッション終了後に全く面識のない方から声をかけられました。話を聞くと大学院でフライトナースをテーマに研究を進めており、私の論文を読んだことを嬉しそうに報告してくれました。その方からは修士論文の相談、論文投稿

に関する助言の依頼があり、現在でも継続して交流を続けることができています。

最近では、ドラマを通してフライトナースに興味をもつ学生も多くなってきています。看護教員を対象とした各種セミナーに参加する中で、卒業研究時のクリティーク文献として私の論文を学生が選定しているという報告を受けることもあります。そのため、私の論文が他の方々にどのように読まれているのか気になりつつもあります。

〔まとめ〕

修士課程修了から原著論文として採択を受けるまでの過程を振り返ってみると、論文投稿時に論文に対する思いが熱くなっていたことに気付きました。そのため、客観的に論文を見直すことができず、査読者の意見を素直に受け入れることができなかつたと感じています。論文投稿をする際には、他者にも見てもらい（可能であれば分野が異なる方）、率直な意見を聞いてから再度論文を見直すことの重要性に気付きました。

また、論文採択を受けるまでは学会側との信頼関係も重要になってきます。学会側とは書面上のやり取りが中心になりますが、学会側が示している提出期限等を守るなどして、信頼関係を維持することが重要です。私は仕事との両立、治療や体調の影響もあり学会側が示した期限内に一度も提出できたことはありません。結果的には再々延長申請をしたこととなりますが、論文投稿する意志があることは適宜学会側に伝えていました。学会側がその意図を読み取って申請延長を2度に渡り許可し、論文を受理していただいたことに対してありがたく感じます。

論文投稿を一人で乗り越えるにはかなりの労力が必要となります。論文は修士課程から指導教員と協働で作上げた力作でもあります。指導教員と密に連絡を取ることが、論文投稿のモチベーションにも繋がります。原著論文として採択されるまで、その都度温かい言葉をかけていただいた指導教員には本当に感謝しています。原著論文として採択を受けたことを指導教員にお知らせするときや実際に学会誌に論文が掲載されたときの喜びは格別でした。

最後に大事なことは、査読結果の知らせを受けた直後の「反抗期」を乗り越えたら大人になるということです。査読者の意見を素直に受け止めることが、査読者に対する感謝の気持ちにも繋がると考え

ます。私にとって冷たい印象に映った査読者Bでしたが、振り返ってみると査読者として私の論文と真摯に向き合い、更に良い論文になるための意見をいただけたのだと考えることができるようになりました。

<交流集会参加者の感想>

交流集会の参加者は12名で、参加動機は「現在投稿しようと考えている」、「現在投稿済みで参考にしたい」が大半でした。各項目に沿った自由回答部分を紹介します。

[論文投稿のプロセスについて]

- ・具体的な時期やどのように修正が戻ってきて、どのように修正してというところまでとてもわかりやすかった。
- ・経験談をきくことができたので具体的に想像ができた。

[自身の論文投稿における課題と方略について]

- ・この交流集会に参加していなかったら投稿への意欲や方略が見えないままだったような気がする。
- ・文字制限のこともあるので、まずは自分が何を一番言いたいのか絞らないといけないと思った。
- ・まだ論文投稿のイメージができていないが、発表者の経験談は大変参考になった。
- ・今から修士論文をまとめる段階だが、どのように論文投稿をしていくのか、そのプロセスが知れてとても良かった。

[交流集会の内容について]

- ・査読者の視点を知ることができ、とても勉強になった。
- ・やってみたいと思うことができた内容であった。
- ・少人数にアドバイザーがいたので話しやすかった。

以上のような感想をいただけたことから、交流集会の目的・目標は概ね達成できたのではないかと考えております。

この他「この話をきけるセッションがあっても良いと思った」、「実際に経験し、難しかった

点や悩んだ点、指摘されたことなど全てオープンに教えていただいて良かった」、「教えていただいたことを活かせるように頑張りたい」、「色々な立場や投稿した先生方と話ができ元気が出た。まずは書いてみようと思う」、「一歩踏み出そうと思いました」という感想もありました。このことから、本交流集会を通して参加者の論文投稿へのモチベーションや行動変容に繋がるきっかけを提供できたのではないかといえます。

交流集会企画者／発表者（量的研究）：八木 哉子
（神戸市立西神戸医療センター／慢性疾患看護専門看護師）

ファシリテーター：池田 清子（神戸市看護大学）

アドバイザー：江川 幸二（神戸市看護大学）